「特集・造園家(ランドスケープ・アーキテクト)に期待する」

緑のフィロソフィーを

安達 瞳子*

For the Philosophy of Green

Toko ADACHI

今日は金環食という午後だ。

父は家族みんなを促して庭に立ち、黒いセルロイドの板切れを目にあてて天を仰いでいた。だんだん太陽が欠け、あたりが暗くなる。見事な日食だった。

その時、なぜか私は足元を見た。と、晴れた日はいつも、丸い光の珠を落としていた竹林の木洩れ日が、眉のような形になっている。初めて見る神秘的な光景に息を呑む思い。黒い眼鏡を通して見る日食よりはるかに鮮烈に感じた。数え切れない光の珠の一つ一つが、糸のように細くなって消えると闇が襲い、再び反対側に現れて完全な円に戻るまでの間、時間にしたらほんの数分だったのだろうが、ずいぶん長い間見据えていたような気がする。

当時の我が家は椿ばかりの藪だったが、中庭が竹林だったため、春夏秋冬、雪の朝も雨の昼下がりもその猛宗竹を眺め、夜は夜で風に鳴る音を耳にして私は育った。いや、外界のすべてのものを、竹林を通して見ていたようにさえ思う。

とりわけ心ひかれたのが木洩れ日で、飛石や落葉の上に、障子や壁の側面にと、光の群れを泳がすその表情に、他のどんな植物をへた光よりも優しい韻を覚えていた。そして次第に、たとえば、ぶっかきの水に水を注いだガラスを盆に載せて廊下を渡る時、手元に踊る竹洩れ日の限らない透明さ清浄さに見惚れ、自分が捜そうとしている美しさがその奥にあるのではないかと思うようになっていた。だから足元を見たのかも知れない。昭和三十三年の春だったと思う。

花芸——私は私の仕事である花を生けるという行為を、そう呼んでいる。「花」は、日本の伝統の花道の花から、「芸」は、西欧の芸術意識に学んで、両者の長所を共にいかしたい願いをこめての命名だ。花芸は草木に鉢を入れ、生命の足元を土から水へ移す。いわば「根の無い世界の話」ということになる。従って、造園家にとっては役に立たないと思う。にもかかわらずこの頁をお受けした理由は只一つ。一人の人間が育った住いの庭園、または、周辺的环境から、どんなに強い影響を受けるかとい

うことを、私の狭い体験を拙い文面から少しでも汲み取っていただくことが叶うとすれば、植物にたづさわる一員として、幸せだと思ったからだ。

私の見た現代の造園

日本庭園という確固たる伝統を持ちながら、拡大する活動領域の渦中、「社会行動」としての新しい造園を確立された関係者のご研究ご盡力に敬意を表すばかりだ。

振り返って見ると、パルナッソスやエデンの園に対する須弥山や蓬萊山の、造園の起源が持つ宗教性。アルカディアに対する八景など理想境や仙境を表現して来た本能とも言うべき思い。また、彩とりどりの花壇を始め池泉・水路・遊歩道などに対する、回遊・船遊・野筋・泉水・枯山水などに見る自然への享受性——遊びの性格も、東西比較すると共通点は多い。

しかし、これらを構築する性格は、いわゆる西洋庭園と日本庭園とでは基本的に異っているのだろう。申すまでもないが、人間中心的な自然観を伝統とする西欧の場合、その幾何学的な構成や技術は、道路の設計や植物の刈り込み方などに私も感じるところが少なくない。その点、自然中心的な歴史を持つ日本が、植樹や立石、方位や季節感など、あくまでも自然生態を尊重して来たことは「作庭記」以来だろう。その姿勢を私は

・自然の超越性

と考えたい。

現代の人間と自然の関係から見れば、造園界が今日担う最大の課題が、地球環境問題であることには論議しつくされていよう。私なりにその方向を

・原自然を次第に環境自然へと変革

であり

・環境造形の進展

いわば人工的な新しい自然の産出と感じている。そしてそこに必要なもう一つの課題を

・自然の芸術化

とすると、作品を生み出す核が、自然と人間の和解調和

*花芸・安達流 主宰

という、きわめて日本的・伝統的と叱られるかも知れない。自然から学ぶという謙虚な姿勢であってほしいと願ってしまう。

花芸と『緑芸』

伝統芸道の一分野である花道は三つの根を持っている。

第一は、神の依代や挿頭に見る、すべての原始民族が抱いていた自然の山々や木々に対する畏敬の念だ。この思いに、仏教と共に渡来した荘厳形式の中の供花が重なって、宗教意識に根ざす花——祈りの感情として出発したことだ。第二は、花合せや花の宴、座敷飾りと共に発達した観賞花の、芸術意識に根ざす花——美の感情だ。そして第三は、四季の変化と多様な植物群に恵まれた風土条件の中で、農耕民族として歩んで来た自然中心的な美の世界観と生活とを伝統とした、独自の自然感情に根ざした意識だ。

これら三つの根から芽ばえ、中世に興った^{たてはな}立花は、茶の湯の席の花と共に男性社会で深められた。死生観を問われた乱世だ。「花」を生命の燃え上りとして見詰め、我が身に重ねて真理を尋ねるよすがとしたことが、他国に類を見ない芸道を確立する基になった。この創世期に比較すれば、近世の立華^{りゅうか}や生花^{せいけ}は形式化をまねがれない。更に、近代から現代への、西洋的な造形意識の影響を受けて無機物を素材にした作風は、日本の伝統の自然観を振り捨てたかに見える。反動的に流行したのがフラワーデザインだ。折りしもバブル経済の最中、花卉産業は一兆円を越えたとニュースは報じた。しかしここにも反省はある。花々を素材視した装飾性は、生命も個性も失ってあたかもペンキで生活を塗っているように、私には感じられたからだ。

緑のフィロソフィーを

先達の築いた様式を超えようと思う思いは、伝統を持つ世界に棲む者の宿命だ。造園界もまた、さまざまな変遷を経て、今後、私など素人の想像を絶する新しい作品を次々と生み出して行かれると確信している。

問題は、そこに、美しいという感動——緑の輝きがあるか否かだと思う。外部からは、さまざまな分野の専門家との気が遠くなるほどの長期に渡る共同作業の要請。内部は、技術・技能・施工管理・修景を志す方々を始め、樹医やグリーンアドバイザーなどの資格制度も設けられ、ますます分業化して行くのだろう。こうしたプロジェクトにおける造園家のアイデンティティを一言で現せと問われれば、私は、より明確な「緑のフィロソフィー」の確立をと答える。誤解を怖れずに言えば、話題の現代建築の前に立つ時、私は今もまだ、緑や水が建築作品を引き立たせるために利用されている感を拭えない時が多いからだ。限られた空間の苦労もあろう。緑の息吹が脈々

と漂うまでに長い歳月を要することは解っているつもりだし、イニシアチブの問題で解決するとも思っていない。その中で私が期待する造園家像は、大地を這いづり廻り、自ら土に手をつ突っ込める人。そこから育まれる汗と感性に裏付けられた緑への深い共感と確たる見識だ。緑に携わる者には、教室内的カリキュラムや形式的なフィールドワーク、更には、紙と鉛筆の机上の設計図ではどうしても越えられない厚い壁が立ち塞かっていると思う。この壁は、生命としての植物に生命としての人間が生涯をかけて取り組むつきあいからしか破れない。自然と人間・伝統と現代・民族と国際・個人と集団など、私共は今多くの難題に直面しているが、造園の中の緑の部分をあえて『緑芸』と呼ばせていただくのは、花芸における私自身の課題だからだ。

再び木洩れ日に

花をいけるということを、私は今

・自然と人間の共存のモラルを尋ねる道

だと思っている。自然を、人間を含む大きな生命として見詰めて来た日本の民族が捜し続けて来た美や芸術は、自分という個を主張し貫くことではなく、自然と一体になろうとする祈りに始まっていよう。それは、個をなくすことではなく、より大きく生かすこと、人間存在を自然存在の普遍性へ生かすこと、いえ、この世界の根源へと高められることでもあろう。

そんな思いを抱いている私の脉に、いつも降り注ぎ揺れているのが竹林の木洩れ日だ。そして、心に焼きついて離れないのが、あの日の竹洩れ日なのだ。

今思えばあれは、畏しいまでの自然の真実の姿だったのだろう。人間の思いの及ばない計り知れない自然の深さと言えばよいだろうか。光の源が変れば木洩れ日まで変わる、当然のこととは言え、誤魔化しや偽りの通用しない自然の摂理の厳しさの一端を垣間見た一瞬。長い同居生活の中で常に優しかった竹林が、一度だけ見せた真顔と息を吐きたい。暮しの中に花をいけるということは、木洩れ日のときめきに似た安らぎの世界だ。けれどその奥に、崇高な太陽の光のような「道」の真実が滲む一瓶の花を生けたい。少なくともそうした深さを見失わない姿勢を持ち続けたいと思っている。

「沈黙の春」の著者カーソンは遺稿に“もし私が、すべての子どもの成長を見守る善良な妖精に話しかける力を持っているとしたら、世界中の子どもに生涯消えることのない「センス・オブ・ワンダー＝神秘さや不思議さに目を見はる感性」を授けてほしいと頼むだろう”と語っている。センス・オブ・ワンダーは、森羅万象が開いてくれる。大きな自然に通じる「園」が、そこに棲む人の人生観をつくるとしたら、造園家の責任は重い。一人一人の^{ランドスケープ・アーキテクト}緑芸家に、私はこのことを問うて見たい。